

令和7年度
北九州市
青少年ピースフォーラム派遣

活動報告書



城山小学校「嘉代子桜」前（令和7年8月8日）

目 次

目的

実施目的	1
青少年ピースフォーラムとは	1
北九州市非核平和都市宣言	1

実施概要

募集要領	2
保護者説明会及び事前研修会	2
長崎市平和学習（行程）	3
事後報告会	4
参加者名簿	5

報 告

長崎市平和学習（8月8日）	6
参加者感想文	12
保護者感想（抜粋）	25

その他

北九州市の平和の取り組み	26
令和7年 長崎平和宣言	28

実施目的

平和な世界の実現は、人類共通の願いです。

北九州市では、長崎に投下された原爆の第一目標であった経緯を踏まえ、平成22年2月10日に「北九州市非核平和都市宣言」を行いました。この宣言において、市民の皆さんとともに、平和な世界の実現に向けて歩み続けることを誓い、これまで戦争の悲惨さや平和の尊さを伝えるための様々な取り組みを行ってきました。

戦争の記憶が風化することが心配される中、若い世代を対象にした取り組みが特に重要であることから、平成26年度より、小・中学生や高校生の皆さんを、長崎市が主催する「青少年ピースフォーラム」に派遣するほか、本市独自の平和学習を実施するなど、戦争の悲惨さや平和の尊さについてじっくりと考えることのできる機会を設けました。

『青少年ピースフォーラム』とは…

毎年、8月8日・9日、全国の小・中学生、高校生等が長崎市に集い、フィールドワークや意見交換などを通じて被爆の実情や平和の尊さを学習し、交流を深め、平和意識の高揚を図るものです。

令和7年度は、全国16都道府県、34自治体、361名が参加しました。

※「青少年ピースフォーラム」の詳細は、長崎市ホームページをご覧ください。

北九州市非核平和都市宣言

平和な世界の実現は、人類共通の願いです。

私たちの国、日本は、世界で唯一の核兵器の被爆国として、この地球上で再び広島や長崎の惨禍を繰り返してはならないことを、世界の人々に強く訴え続けてきました。

私たち北九州市民は、長崎に投下された核兵器の第一目標が小倉であったことを重く受け止め、核兵器の恐ろしさ、戦争の悲惨さ、平和の尊さを、次の世代に伝え、核兵器のない、戦争のない、平和な世界を築いていかなければなりません。

よって、私たちは、命と平和の大切さを深く認識し、核兵器の廃絶と平和な世界の実現のために歩み続けることを誓い、ここに北九州市を非核平和都市とすることを宣言します。

平成22年2月10日 北九州市

実施概要

1 募集要領

- (1) 応募要件 北九州市内居住者及び北九州市内に所在する小・中・高校に在学する小学生（6年生）、中学生、高校生等で、次の要件を全て満たす者
- ①平和学習に意欲があること
 - ②自力で身の回りの準備などができること
 - ③保護者説明会・事前研修会、事後報告会を含め、全ての日程に参加できること
 - ④北九州市、平和のまちミュージアムのホームページ、各種SNS、冊子及び各種メディア等に氏名、学校名等、活動中の写真や事業終了後に提出いただく「感想文」等が掲載されることに同意できること
- (2) 募集方法 所定の申込書（北九州市、北九州市平和のまちミュージアムのホームページに掲載するとともに、市内全小・中学校、高校に配布）に必要事項を記入の上、郵送等で市に提出
- (3) 募集期間 令和7年5月20日から6月4日まで
- (4) 募集人数 18名程度

2 保護者説明会及び事前研修会

- (1) 開催日程 令和7年8月3日（日）9：30～12：30
- (2) 開催場所 北九州市平和のまちミュージアム 多目的ホール（小倉北区内4-10）
- (3) 主な内容
- 保護者説明会**
- ・実施目的、スケジュール等の説明
 - ・質疑応答
- 事前研修会**
- ・北九州市の歴史や平和の取り組み等の紹介
 - ・平和のまちミュージアム見学・解説
 - ・DVD『北九州 ～戦争の記憶～ 私たちへの伝言』鑑賞
 - ・原爆犠牲者慰霊平和祈念碑見学
 - ・参加者ワークショップ（自己紹介、班単位による意見交換（テーマ：『派遣で学びたいこと(目標)』）、班発表



派遣事業の説明会后、ミュージアム見学や班ごとの事前研修会を行いました。

8月8日（金）		8月9日（土）	
			起床
7:50	市役所本庁舎集合（南口玄関前）	7:00	朝食（宿泊施設内） ・出発準備を整えて朝食
8:10	「出発式」後、出発 	7:50	宿泊施設 発 
移動	▶ 高速道路PAで10分休憩 × 2回 （基山PA・大村PA） ●DVD「二重被爆語り部 山口彊の遺言」ほか 視聴 	8:30	●長崎原爆資料館 見学 
11:20	●城山小学校(城山小学校平和祈念館) 見学  ・嘉代子桜前で記念撮影 	9:30	原爆資料館 徒歩 発 
		9:40	平和公園 着
12:20	城山小学校 発  ●山王神社(一本柱鳥居)〔車窓見学〕 	10:45	・原爆犠牲者慰霊 平和祈念式典 参列 
12:40	昼食	11:45	～
13:30	昼食会場 発 	11:50	平和公園 バス 発 
13:45	ピースフォーラム会場（平和会館）着	12:30	昼食
14:00	■ピースフォーラム 参加 開会行事  ・開会式 鈴木長崎市 市長 ・被爆体験講話 三瀬清一朗さん	13:20	昼食会場 発 
15:25	フィールドワーク ≪B-① 平和公園コース≫ ・平和祈念像前で記念撮影 	13:40	ピースフォーラム会場（出島メッセ長崎）着
17:45	「平和の灯」用キャンドル絵付け	14:00	■ピースフォーラム 参加 平和学習 ・「平和」等に関して、他市町参加者との意見 交換 など ・参加者全員で記念撮影 
18:15	■ピースフォーラム 初日終了		
18:25	平和会館 発 徒歩 	16:00	■ピースフォーラム 行程終了
18:30	夕食・ミーティング会場 着 夕食	16:20	ピースフォーラム会場（出島メッセ長崎） 発 
19:20	●ミーティング（～20:00）  ・1日目振り返り、2日目事前学習 等	移動	▶ 高速道路PAで10分休憩 × 2回 （金立PA・古賀PA） ●全体振り返り  ・修了証披露
20:05	夕食・ミーティング会場 発 		
20:35	宿泊施設 着（チェックイン）	19:20頃	市役所本庁舎到着（南口玄関前） ・『ピースフィールドクラブ』について（お知らせ） ・解散式 → 解散
21:00	入浴、翌日準備、自由時間		
22:00	就寝		

●・・・北九州市独自の学習プログラム / ■・・・「青少年ピースフォーラム」プログラム

4 事後報告会

(1) 開催日程 令和7年8月21日(木) 14:00～15:30

(2) 開催場所 J:COM 北九州芸術劇場 中劇場

(3) 主な内容 **北九州市 総務市民局長への報告(第1部)**

- ・三浦総務市民局長挨拶
- ・引率者代表による事前研修会及び長崎市平和学習の概要報告
- ・参加者による報告(活動で学んだことなど)
- ・参加者と総務市民局長 歓談
- ・記念撮影

報告会(第2部)

- ・活動写真をスクリーン投影しながらの活動報告
- ・参加者による感想等発表
- ・修了証書授与



参加者1人ずつ、活動で学んだことを三浦総務市民局長に報告しました。



事後報告会終了後、三浦総務市民局長、重信平和のまちミュージアム館長と記念撮影をしました。

参加者名簿

■引率者

三角 純子	みすみ じゅんこ	平和のまちミュージアム事務局 企画係長
二村 晶子	ふたむら あきこ	平和のまちミュージアム事務局 主査
畠中 かおる	はたなか かおる	保健担当（派遣看護師）
珠久 カエラ	しゅく かえら	引率ボランティア（北九州市ピースフィールドクラブ）
松本 紗幸	まつもと さゆき	引率ボランティア（北九州市ピースフィールドクラブ）

■参加者 ※参加当時

学校名	学年	名前	ふりがな
富野小学校	6年	安部 颯佑	あべ そうすけ
小倉中央小学校	6年	安部 ンペポ 眞耶	あべ んぺぽ まや
槻田小学校	6年	塚本 那々美	つかもと ななみ
貫小学校	6年	柘植 まどか	つげ まどか
湯川小学校	6年	中井 心音	なかい みお
折尾西小学校	6年	林 未来	はやし みく
板櫃中学校	1年	糸田 橘花	いとだ きっか
上津役中学校	1年	重松 和希	しげまつ かずき
二島中学校	1年	田中 千尋	たなか ちひろ
小倉日新館中学校	1年	比嘉 美結	ひが みゆい
守恒中学校	2年	上田 基誠	うえだ もとなり
緑丘中学校	2年	大田 佳奈	おおた かな
九州国際大学付属中学校	2年	山本 仁愛	やまもと にな
思永中学校	3年	井澤 貴幸	いざわ たかゆき
敬愛高等学校	1年	城戸 由治	きど よしはる
小倉東高等学校	1年	佐藤 陽菜	さとう ひな
戸畑高等学校	1年	白石 紗彩	しらいし さあや
能美学園星琳高等学校	3年	増田 美博	ますだ みひろ

<参加者学年別内訳> ※参加当時

小6	中1	中2	中3	高1	高2	高3	計
6	4	3	1	3	0	1	18

長崎市平和学習（8月8日 金）



市役所前に全員集合！
「出発式」終了後、ご家族に見送られいよいよ長崎に向けて出発です！！



バスの中。
これからはじまる研修に
どきどきしています。



途中、大村湾SAで班ごとに記念撮影しました。
今にも雨が降りそうな天気でした。降らなくてよかった！

長崎市立 城山小学校

城山小学校は、爆心地から500mの場所にあり、最も爆心地に近い国民学校でした。当時、多くの児童らが亡くなりました。ここでは、北九州市立小中学校等に植えられている「嘉代子桜・親子桜」に由来する「嘉代子桜」や「被爆校舎（城山小学校平和祈念館）」を見学しました。



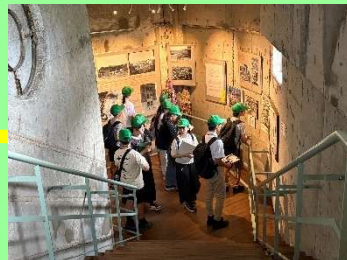
傾斜のきつい階段を登って
城山小学校へ



「嘉代子桜」の前で記念撮影



被爆した木を見ながら何を
話しているのかな？



踊り場にある資料もしっかり見ます。



熱心にメモを取っていますね。



昼食



長崎名物でお昼ご飯。お腹いっぱいになったかな？

平和会館

令和7年度 青少年ピースフォーラム



開始前、多くの地域から来た参加者が自分の席を探して着席していきました。



無事北九州市の席へ

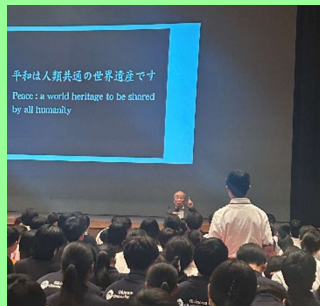


1945年8月9日を語る

三瀬清一郎 (1935年生れ)
国民学校1年生の時、太平洋戦争勃発 同5年生(10歳)の時、爆心地より約3.6km(現、矢の平町)の家の中で家族8人被爆

被爆体験講話の聴講です。
三瀬清一郎(みせ せいいちろう)さん(被爆当時10歳)が、想像を絶する当時の様子を語ってくださいました。

三瀬さんは参加者の質問に丁寧に答えてくださいました。



フィールドワーク

☆フィールドワークでは、長崎市の「青少年ピースボランティア」の皆さんが当時の写真などを見せながら、爆心地周辺にある被爆建造物等を丁寧に案内してくれました。



いよいよこれからフィールドワークです！案内して下さる長崎市の青少年ピースボランティアの方の説明をしっかりと聞きました。



今にも雨が降ってきそうな空。ちょっと心配しながら出発しました。



浦上天主堂の遺壁です。この側壁は聖堂の南側の一部で、新しい天主堂建設のため、この地に移築されたものです。



被爆当時の地層です。
原爆によって壊された家の瓦やレンガ、熱線で焼けたガラスなどが大量に埋没している地層が遺されています。



下の川です。
原爆当時、水を求めて多くの人が集まった場所です。見学時は**キッズゲルニカ**による世界の子どもの絵が展示されていました。



平和の泉を見学しました。
被爆し水を求めてさまよった少女の手記を刻んだ石碑が正面に設置されています。

平和公園 平和祈念像



平和祈念像の前で記念撮影
平和祈念像の垂直に掲げた右手は原爆の脅威を、水平に伸ばした左手は平和を、軽く閉じた目は戦争犠牲者の冥福を祈っているとのことでした。



平和会館 キャンドル絵付

みんなで絵付けしたキャンドルは、9月に爆心地公園で開催された『**平和の灯**』で明かりがともされました。



一生懸命に図案を考えて描きました。



願いを込めて完成！
携帯電話のライトで試してみました。



夕食



ちょっと時間は押し気味でしたが、いよいよ夕食です。フィールドワークで歩いたのでお腹はぺこぺこ。夕食後はミーティング。班ごとに青少年ピースフォーラム二日目の準備を行いました。



長崎市平和学習（8月9日 ⊕）



朝から天気心配ですが、二日目開始！ 今日頑張らしよう！

長崎原爆資料館

長崎原爆資料館では、目を覆いたくなるような写真や資料も数多く展示されていました。あらためて核兵器の恐ろしさを感じながら熱心に見学しました。



最初に 11 時 2 分で止まった時計があります。



ファットマンの模型です。



長い回廊を歩いて出口へ。



被爆80周年 長崎原爆犠牲者慰霊平和祈念式典

平和公園 令和7年8月9日 10:45

長崎市長による「長崎平和宣言」、被爆者代表による「平和への誓い」のほか、内閣総理大臣、国際連合事務次長兼軍縮担当上級代表、長崎県知事による来賓挨拶もありました。厳粛な雰囲気の中、国内外からの約2千700人の参列者が、黙禱をささげ、原爆で亡くなられた方々のご冥福と世界の恒久平和を祈りました。



土砂降りの雨の中、ようやく席にたどりついてほっとしました。



内閣総理大臣による挨拶



地元小学生による合唱



亡くなられた方への献水

昼食



長崎名物「トルコライス」！共に学んだ仲間との最後の食事です。このあとはフォーラム会場での意見交換会。もうひと踏ん張りです。



出島メッセ長崎

全国から集まった同世代の仲間と、「違っていてどういこと？違っていて悪いこと？」をテーマに、「どのような『違い』があるか」、「その『違い』によって、何が起ころのか」という二つの視点から意見交換を行いました！



受付して、会場に入ります。

アイスブレイクで話しやすい雰囲気づくり



全国から集まった青少年同士でグループが組まれました。



意見交換会では、他の自治体の子どもたちとグループになり、活発に意見を交わしました。最後に、いくつかのグループが代表して意見交換の内容を発表して締めくくりました。



フォーラム終了！
みんなで記念撮影
しました。



二日間にわたる行程を終え、「令和7年度 青少年ピースフォーラム派遣事業」は終了しました。
夕方、無事に北九州市に到着。「解散式」を行いました。

☆ 引率の皆さん ☆



(左から)北九州市ピースフィールド
クラブ(愛称:ピースィ)のメンバー
の松本さんと珠久さん、看護師の畠中
さんです。
暑い中、大変お世話になりました！

参加者感想文

○学校名・学年は、参加当時のものです。

○人名、地名等を除き、原則として、小学校6年生以上で習う漢字に「ふりがな」を付けています。

1 これからの平和のために

富野小学校 6年 あべ そうすけ
安部 颯佑

わたしは今回、長崎の平和祈念学習に参加しました。終戦から80年が経ち、戦争の記憶が年々薄れていく中で、改めて平和の大切さを学びたいと思ったのが応募の理由です。長崎に原爆が投下されたのは、当初の目的だった小倉が前日の八幡大空襲の煙や天候不良で視界が悪く、変更された結果だったと知り、強い衝撃を受けました。もし状況が違っていれば、私のひいおじいちゃんが体験した八幡大空襲の翌日に原爆が小倉に落ちていたかもしれません。その偶然の積み重ねの中で、私が今ここに生きているという事実を考えると、命の重みを強く実感しました。

長崎では被爆者の方からお話を聞きました。ご家族は一度助かったものの、その後放射線の後遺症で亡くなられたことを知り、原爆の恐ろしさを改めて感じました。また、学校の様子を見に行ったときに想像を絶する光景を目にされたと聞き、その言葉の重みに胸が震えました。資料館で見た展示物や写真などは、日常の幸せが一瞬で奪われたことを物語っており、戦争の悲惨さを強く心に刻みました。

今回の学習で感じたのは、「平和は偶然に続くのではなく、多くの人の努力で守られてきたものだ」ということです。戦後80年、日本は戦争をせずに歩んできましたが、それは決して当たり前ではありません。だからこそ、私たちは平和を大切に、守り続けなければならないと思いました。

では、平和を守るために私たちにできることは何か、と考えました。それは「争いを避ける」ことです。意見が対立した時は相手を尊重し、状況に応じてまとめることが大切だと思います。友達とけんかをした時も、自分が間違っていれば素直に謝り、相手の話を聞くことが大事です。そして安心して意見を言える環境を作ることが平和な社会につながるのだと感じました。

今回学んだことを周囲に伝え、共感を広げ、戦争の悲惨さを風化させないことが必要だと考えます。若い世代の私たちには、その責任があります。私はこれからも日常の幸せに感謝しながら、平和の大切さを語り継ぎ、自分にできることを実行していきます。



わたしは、「ピースフォーラム」に参加する前は原爆は広島と長崎に昔、落とされたということしか知りませんでした。

「ピースフォーラム」に参加して被爆を体験した三瀬さんのお話が今でも心に残っています。とくに心に残ったのがみんな原爆直後の火傷で「水をくれ〜」「水をくれ〜」と水を求める人が多かったことです。でも周りにいた兵隊さんは、「のむな!」と言ったそうです。どうしてかという火傷をしている体に水分を取ると逆にショック死を招くおそれがあったからだそうです。

他には、さっきまで水を求める人の声がしていたはずなのにだんだんと声がしてこなくなったと三瀬さんは、話していました。すると兵隊さんが「この人はもう死んでいる」と言われたそうです。そして命を落とした人が運動場で山づみにされ、大人から子供まで次々と焼かれていったそうです。私だったら原爆が落ちる前までいた人たちがたった一つの原爆で命を落し焼かれて行ってしまふなんて考えただけでもトラウマやきょうふでいっぱいになりそうです。

このようなことを三瀬さんが昔の体験から今の人たちに「何があっても戦争はダメだ」ということを教えてくれました。

わたしは、この2日間で大切なことをたくさん学びました。だからこれからは、8月9日と8月6日を忘れません。そして原爆のおそろしさや苦しんだ人の思いを周りの人や家族に伝えていきたいと強く感じました。

今、この世界で戦争が起きています。そしてこのしゅんかんも爆弾が落とされ、たくさんの命が失われています。私はどんな国も武器を持たず、話し合いによって相手のことを認め合うのがこの世界にとって大切なことだと思います。

わたしは学校の授業で戦争というものがあると1年生の時に知りました。私は毎日平和に生活していますが、昔の日本にこんな辛く恐ろしい戦争があったとも思いませんでした。日本の歴史を知る中で戦争はさけて通ることができず、もっと詳しく知り私たちの世代、そのあとの世代にも語り継いでいく必要があると思います今回の研修に参加させていただきました。

私が長崎に行き、二日間で見たり聞いたりしたことの中で一番心に残ったことは被爆体験者である三瀬清一郎さんの講話でした。当時10歳であった三瀬さんは、学校の先生に「もし原爆が落ちてきたらどうするのか」ということを授業で教わっていたそうです。親指で耳を抑え人差し指と中指で目を抑えると教わったそうです。私たちは学校で授業を受け、楽しく校庭で遊び体育も

しますが、^{わたし}私^{はな}たちの学校生活とはかけ離れていておどろいたと同時に^{わたし}私^{ふだん}たちが普段当たり前のように授業を受けている学校生活が本当は当たり前ではなく幸せなことなのだと思います。また、戦争が終わり^{みせ}三瀬さんが友人と学校へ様子を見に行くと今までの学校とは大きくかわり、^{げんぱく}原爆によって^{きず}傷ついた人たちがたくさんいたそうです。「水をくれ」、「殺してくれ」と様々な言葉を口に^{ひとびと}する人々を前に子供であった^{みせ}三瀬さんは何もすることができなかったそうです。^{わたし}私はその光景を想像するだけで^{なみだ}涙が出そうでした。

^{わたし}私たちが今幸せに生活できているのは昔戦争を経験した方が先の日本のために努力し、平和であることを望んでくれたからだと思います。現代の人々は戦争のことを知ろうとする人が少ないです。戦争が辛く、家族や当たり前の生活をうばうものだと今回^{わたし}私は学ぶことができましたが、^{ひばくしゃ}被爆者の方が年々減ってきているため^{わたし}私たちのような若者が戦争についてもっと詳しく^{くわ}学び語り継いでいくことが必要だと思いました。

4

戦争の悲惨さを伝えていくために

貫小学校 6年 柘植 まどか

^{わたし}私はこの派遣事業を通して、改めて^{げんぱく}原爆の悲惨さや命の大切さについてじっかんできたと思います。長崎市では、^{ひばく}ひ爆のおそろしさや、その後のこういしうのかなしさなどについてを長崎市全体で語っているように思いました。

平和の^{いずみ}泉では、周りにたくさんの折りづるががざられており、中には遠い所からおくられてきている物もありました。^{わたし}私^{げんぱく}はそれを見てみんなが原爆がだめだと考えているのがとてもよく伝わってきました。

平和の^{いずみ}泉をまっすぐすすむととても大きな^{きねん}平和祈念像があります。右手は^{げんぱく}原爆の脅威を水平に伸ばした左手は平和を、横にした足は^{げんぱく}原爆投下直後の長崎の静けさを、立てた足は救った命を表し、軽く閉じた目は戦争犠牲者の^{めいふく}冥福を祈っているという意味があります。^{わたし}私^{わたし}は、一つ一つのしせいに意味がありたくさんの思いがこめられているのだなと思いました。

二日目の^{きねん}平和祈念式典では、多くの人があつまり中には外国人もいました。長崎平和^{せんげん}宣言では^{ひばくしゃ}被爆者の思いや、国での取り組みなどについてを語っていました。

その後の意見交流会では、いろいろな人の考えを聞いて自分の考えを深めるという活動をしました。自分の考えを深めることができ、あいての考えもきくことができ相手の考えもありだなと思いました。

このように、長崎には平和をつくるための取り組みや^{せんげん}宣言、平和をいのる像などがあります。^{わたし}私^{わたし}達がしなければならないことは、^{ひばくしゃ}ひ爆者の思いを次の世代につなげていくことです。八月九日午前十一時二分これはぜったいにわすれてはいけません。たくさんの方が一しゅんにしてなくなってしまったからです。

私^{わたし}がこのピースフォーラムに参加したいと思った理由は、今被爆者^{ひばくしゃ}の人がどんどん減ってきていて戦争のことを知らない人が増え、平和に関心のある人が減ってきているから私^{わたし}が戦争についてしっかり知って、たくさんの人に伝えたいと思ったからです。

一日目、一番印象に残ったのは被爆者体験講話^{ひばくしゃ}で三瀬^{みせ}さんの話を聞いたことです。三瀬^{みせ}さんは被爆^{ひばく}当時四年生だったそうで、私^{わたし}は今六年生なので四年生だと私^{わたし}と同じくらいの年です。当時三瀬^{みせ}さんは食べ物^なは全然なくお腹^{なか}がすいたら動かずに寝^ねていて、食べ物は自分で探しに行っていたそうです。友達^{ともだち}は原爆^{げんぱく}で何人も亡^なくなったそうです。私^{わたし}は毎日友達と遊んで、朝昼晩用意^{ばん}してもらったご飯^{ごはん}を食べるのが当たり前です。私^{わたし}だったらいつもお腹^{なか}がすいているなんて我慢^{がまん}できません。友達が一人でも亡^なくなってしまったら立ち直れなくなると思います。そんなことは二度と繰り返^くしたくありません。そのために三瀬^{みせ}さんが話してくれた戦争の悲惨^{ひさん}さをたくさんの人に伝えていきたいです。

原爆資料館^{げんぱく}には、黒焦げ^{くろこ}になった人の写真^とや溶けた瓶^{びん}などがありました。人が一瞬^{いっしゆん}にして黒焦げ^{くろこ}になったり、瓶^{びん}が溶けたりするような高熱^{たかねつ}は私^{わたし}には想像^{さうぞう}が付きません。でも原爆^{げんぱく}では数えきれないほど多くの人^{ひと}がその熱^{ねつ}をあびたりして苦しんだということ^{こと}をわすれてはいけな^いと思いました。

平和祈念式典^{きねん}には、北九州市^{きたきゅうしゅう}の代表^{だいひょう}できているという責任感^{せきにん}を持って出席^{しゅっせき}しました。長崎市長^{ながさき}は、「一人^{ひとり}は微力^{びりよく}であっても無力^{むりよく}ではない」とおっしゃ^{おっしゃ}っていました。私^{わたし}はこの言葉^{ことば}にとても共感^{きかん}しました。

ピースフォーラムで違い^{ちが}について話し合^あって、どんな違い^{ちが}があるか、その違い^{ちが}によって何が起^おこるのかを考^{かん}えていくと、違い^{ちが}によって争^まいが起^おこりそれが戦争^{せんそう}につなが^{つな}がっていくのではないかと思^{おも}いました。違い^{ちが}によっておこる争^まいをなくすためには、それぞれの違い^{ちが}（個性^{こせい}）の良^よさを見^みつけ、みんながお互^{たが}いの違い^{ちが}を認め合^あうことが大切^{たいせつ}だと考^{かん}えました。これも戦争^{せんそう}を繰り返^くさないために、私^{わたし}たちにできることの一つ^{ひとつ}だと思^{おも}いました。これから心^{こころ}がけていきたいです。

この二日間^{ふたひかりかん}で学^{まな}んだことを、たくさんの人に伝え^{つた}ていきたいです。これからは戦争^{せんそう}や平和^{へい}についてもっと学^{まな}びたいと思^{おも}いました。世界中^{せかいじゅう}が平和な未来^{みらい}を私^{わたし}たちの手^てで作^{つく}っていきたくたいです。

私^{わたし}は人^{ひと}への無関心^{むかんしん}や自分勝手^{じぶんがって}な多^{おほ}くの想^{おも}いが戦争^{せんそう}へと繋^{つな}がっていくと思^{おも}っていて、また平和^{へい}を守^{まも}ろうとする人^{ひと}達の活動^{かつどう}にもっと目^めを向^むけてもらいた^{いた}いと思^{おも}っていました。その為^{ため}に長崎^{ながさき}で見^みる事^{こと}

全てを自分の身に起きる事として考え、どうしたらそれを止める事ができるか、また、それをどう周りに伝えていけるかを考える為に参加したいと思いました。

爆心地から約五百 m の城山小学校を見学した時に、展示してある学用品や説明を読んでいると児童皆で元気に校庭や階段を走り回っていた姿が想像されました。そんな日常を一瞬にして消し去った原爆はこれから先、二度と使われてはいけないうと強く感じました。

三瀬さんの被爆体験講話では、自分の小学校で救護が間に合わず、怪我を負った人が次々と亡くなっていく姿を嫌と言う程見たと言われていました。私だったら思い出したくもないような辛い記憶を誰にも同じ思いをして欲しくないという強い思いで語って下さっているのが伝わってきました。被爆者の方達の貴重な言葉は私達若い世代がしっかりと受け止め、次の世代に語り継いでいこうと思いました。

参加メンバー、引率者の方々、講話をして下さった三瀬さんをはじめ、平和式典への参加者など、長崎で出会った方は、周りの人に優しく、平和の為にできる事を懸命にされている方ばかりでした。そこには人への無関心や自分勝手な思いなどは存在しませんでした。このような方達との出会いをどんどん周りに繋げていく事が戦争への流れを止める方法かもしれないと考えました。それと同時にまずは自分自身が家族や友人など周りの人達に優しくしたり自分の周りから平和になるように努力していく事が大事だと思いました。

7

私の平和宣言

板櫃中学校 1年 糸田 橋花

私は戦争について考えないような生活を送っていました。けれどある日、図書館に行った時、アンネ・フランクの本が目にとまりました。戦争がいかに残酷か、理不尽なものかを知りました。今まで戦争に対して興味が無かった私が、アンネ・フランクの本をきっかけに戦争について興味を持つようになったのです。その時私が出会ったのが、ピースフォーラムのチラシでした。

私はたくさん学びました。その中でも心に残っていることが二つあります。一つ目は三瀬清一郎さんのお話です。清一郎さんの家は爆心地から三、六キロ離れた場所でした。数日後、学校が心配になり見に行くと地獄のような風景だったそうです。けが人の中には、全身血まみれで、男女の区別さえつかない人もいたらしいです。私は、男女の区別ができないくらいって、どんな感じなんだろうと思いました。そんなことを思っていると清一郎さんがスライドショーで写真を見せてくれました。私はその痛々しい姿を見て胸が押し潰されそうでした。でも清一郎さんの方が苦しかったに違いありません。思い出したくない記憶を思い出しながら語ってくださった清一郎さんの願いを共に次の世代に繋げていきたいです。二つ目は、平和祈念像のポーズです。

私は平和祈念像のポーズに意味があるというのを初めて知りました。右手は原爆の脅威、左手は平和、閉じた目は戦争の犠牲者の冥福を祈る象徴だそうです。私はこの言葉を聞いて戦争がど

れだけ恐ろしいかを実感することができました。

私はこの貴重な2日間の経験を活かして、家族や友達に伝えて今私に出来ることをやっていきたいです。将来大人になったら私がこのピースフォーラムで聞いた被爆者さん達の願いや希望、目標を私たちの世代に伝えていこうと思います。

8

長崎を最後の被爆地にするために

上津役中学校 1年 重松 和希

僕が今回ピースフォーラムに参加しようと思ったきっかけは、父親の話で曾祖父が広島で被爆したことを知り、「核兵器をなくそう」と言う思いが湧き上がりました。しかしそこまで深く考えたことはありませんでした。その考えを深めるためのヒントになると思い今回の「ピースフォーラム」に参加しました。そして、原爆資料館で「核兵器をなくそう」と言う考えは深くなりました。なぜなら「人がいた場所が一瞬で影になってしまう」そんな残酷なことはありません。

平和式典での平和宣言や平和への誓いなどで「核をなくそう！」や「長崎を最後の被爆地へ」など心から核兵器はだめだということが伝わってきました。

そして今年は戦後80年の節目です。80年たった長崎はとてにぎやかになっていました。こんなところに原爆が落とされたと思うととても悲しい思いになりました。

バスの中で見たDVDでは原爆投下後の当時、川に水を飲みに来てその場で亡くなり、川に「人間いかだ」が出来るぐらいたくさんの方が亡くなっていました。とても心が痛みました。

今僕は楽しく学校や遊びや好きなことなどする事が出来ていますが、当時の城山小学校はこのようなことはしたくても出来ないことがわかりました。そして原爆投下の日グラウンドなどの外にいた人は即死だったそうです。でも教室にいた人は後日亡くなった人や奇跡的に生存した人もいました。これによりたくさんの方の生徒の青春が奪われてしまいました。僕が青春を奪われたと思うととても嫌だし許せません。

今回は写真ではなく実際に資料や遺品を見る事が出来、とても迫力がありません。原爆落下中心地碑が特に迫力がありません。この上空で炸裂し、たくさんの方の犠牲者が出たので原爆を落としたアメリカや核爆弾を持っている国を許してはならないと思いました。

僕は将来自衛隊になり、世界の平和をつくっていきたいと思っています。それまでは、まだ原爆・戦争の知らない若い世代にこのことを伝え、核兵器のない平和な世界をつくっていき、長崎を最後の被爆地にしたいです。



私が一番心に残った言葉は、被爆体験講話の中で三瀬さんか語った「生きてて良かったね。助かって良かった」という言葉です。この言葉は、夏休みが終わって二学期が始まった時、友達に掛けた第一声だったそうです。私はいつも「夏休み、何してた?」「楽しかった?」という会話から新学期が始まります。生きていることが当然で、楽しい時間を過ごしていることが大前提の質問です。しかし、そんな「当たり前」が当たり前ではなかった時代があったことに、強い衝撃を受けました。中には、夏休みの間に亡くなった友達もいたと聞き、胸が締めつけられました。平和であること、生きて次の日も友達や家族と会えることの幸せを忘れずに、毎日を過ごしたいと強く思いました。

もう一つ心に残った言葉は、二重被爆者の山口さんの「真実は伝わるだろう、国境を越えて。それが、どんなに小さな声でも必ず届く」という言葉です。昨年、日本原水爆被害者団体協議会がノーベル平和賞を受賞しました。これは長年にわたり平和を訴え続けてきたからこそこの受賞だと思います。一人一人の被爆者や戦争経験者が、自らの体験を語り継ぎ、核廃絶を訴え続けてきました。だからこそ私たちは、この悲惨な歴史から目を背けず、後世に伝えていかなければならないと心に誓いました。平和の種は、すでに私達に託されています。それをみんなで大きく咲かせるために、今回ピースフォーラムで感じたことを、私も周りの友達に話していきたいです。

たとえ私の声が小さくても、それが集まれば必ず届くと信じています。小さな花かもしれませんが、たくさん集まれば大きな花を咲かせることができる。これからも、平和の種をまき続け、未来へとつないでいきたいです

2025年8月9日、長崎の空は鉛色の雲に覆われ、冷たい雨がまるで涙のように街を打ちつけていました。四方から吹きつける風は傘を大きく揺らし、雨粒が地面や木々に跳ねる音が途切れることなく響きます。まるで戦没者たちの悲しみや無念が、空から街に流れ込んでくるように感じられ、戦後八十年の今も長崎が抱える深い傷跡を肌で感じました。

原爆によって、多くの命が一瞬で奪われました。家族や友だちと過ごす当たり前の日々が、何の前触れもなく消えてしまった悲しみ。その失われた日常は、数字や記録だけでは語り尽くせないほど重く、深いものだったはずです。今では美しく整えられた街並みや緑豊かな公園の中にも、その悲しみは静かに息づいているようでした。

平和公園や原爆資料館、祈りの場に立つと、長崎に眠る人々の想いが雨と風に乗って胸に届い

てきました。見知らぬ誰かの写真や遺品を見つめるたび、その人が歩むはずだった人生や、交わされるはずだった笑顔の会話が想像され、胸の奥が切なくなりました。

私は青少年ピースフォーラム派遣事業の旅で、長崎の悲しみを知り、同時に今を大切に生きるこの意味を深く考えることができました。過去を忘れず、現在を丁寧に生きることこそが、未来の平和につながると感じたのです。そして、今回の旅で感じたこと、学んだことを次の世代にも私達から伝えてきたいと思いました。

平和は、遠くの誰かだけが守るものではなく、一人ひとりの小さな願いや行動の積み重ねから生まれます。だからこそ、今日を感謝しながら過ごし、人と人とが笑顔でいられる時間を少しでも増やしたいと思います。

長崎で降った雨と風は、私達にその想いをそっと教えてくれました。この気持ちを忘れずにこれからも歩いていき、二度と同じ悲しみが繰り返されないこと。そして、未来の人たちが、穏やかな空を見上げながら、安心して笑える世界が続くことを願い、行動していきたいと思います。

11

核戦争の時計を進めないために

守恒中学校 2年 上田 基誠

僕は平和学習を通して、戦争の恐ろしさを強く感じました。特に恐ろしく感じたのは核兵器の被害の大きさです。長崎市の被害者の合計は死者約7万3千人、負傷者約7万4千人と、長崎市の当時の人口の2分の1を超える被害者が出ています。核兵器が放つ熱線、爆風、放射線により外傷を負った方や深刻な健康被害を受けてしまった方がたくさんいます。中でも放射線物質は人体を内側から破壊していきます。原爆投下後に降った黒い雨には強い放射線物質や酸性物質が含まれており、その雨に汚染された水を飲んでしまうと知らない間に体が蝕まれていきます。そのことを自覚できない点が特に恐ろしいと感じました。たった一発の核兵器によって、これほど多くの命が奪われ、傷つけられるという現実を知り、僕は核兵器の使用は二度とあってはならないと強く思いました。そして、この残酷な核兵器を一刻も早く廃絶しなければならないという思いで、胸がいっぱいになりました。また、当時小学生だった方のお話を聞き印象に残ったことは、夏休み明けに学校で友達と交わした最初の言葉が「生きていてよかったね」だったということです。これを聞いて僕はその当時は生きているということが決して当たり前のことではなかったのだと思いました。

世の中にはまだ1万数千発の核弾頭が存在しています。そんな世の中で私たちは本当に安心して暮らすことができるでしょうか？

僕たちは、長崎を最後の被爆地にするために世界中の核弾頭を廃絶していかなければなりません。この現実を一人でも多くの人に知ってもらうことで、核戦争という最悪の未来へと向かう世界の時計を少しでも遅らせることができるのではないのでしょうか。

僕にできることは小さいかもしれないけれど、まずは知ること、伝えること、そして忘れないことから始めたいです。平和は誰かが守ってくれるものではなく、僕たち1人1人が守っていくものだ。この平和学習を通して感じました。

12

「派遣事業」を通して学んだこと

緑丘中学校 2年 大田 佳奈

私は、この派遣事業を通して様々なことを学びました。1つ目は「嘉代子桜」の今の存在です。嘉代子桜は、旧城山国民学校にいて被爆して、亡くなられた女学生、嘉代子さんの母である林津恵さんが、旧城山国民学校に娘が好きだった桜を当時は50本植えており、今では6本残っている事がわかりました。そして、1985年の3月に植えられた25本の「跡継ぎの嘉代子桜」である計31本が存在している事がわかり、私は戦争という悲惨な事をもう二度と繰り返さぬよう、嘉代子桜を見て思い出してもらおう。という一生懸命な気持ちを感じる事ができました。そして、いまだに受け継がれている深い意味を学ぶ事ができました。2つ目に学んだ事は、この旧城山国民学校の一部に作られている旧城山国民学校平和祈念館は、爆心地から西方500メートルの場所にある事と、最も爆心地に近い国民学校である事もわかり、私はこの事から、この校舎を一部残す事により、世界の平和を訴え、改めて戦争や平和について考え、世界に発信する大事さを学びました。旧城山国民学校平和祈念館で展示物を見ていると、その写真の奥から「助けて・・・」「苦しいよ・・・」等の思わず目を背けてしまいそうなほど戦争は悲惨ではいけないと言う事を改めて感じる事ができました。

次に学んだ事は、平和のありがたさです。なぜなら、昔はどこで、何をしても、空襲警報が鳴っておかしくない状況でした。しかし現代は、空襲警報もなく、爆撃機が上空を通り過ぎる事もないのは今、なにげなく過ごしている日常は平和に満ちて、今当たり前前にできている事は、昔、「非核三原則」を掲げたのと同時に、当時のような事を二度と起こさぬよう誓ったご先祖様だと言う事を深く実感し、学ぶ事ができました。

なぜなら、空襲体験講話をして下さった三瀬清一郎さんは、夏休みに、オルガンの低い音を鳴らして遊んでいた際、空襲警報は鳴っていないのに、アメリカの爆撃機が突如原爆を落とし、三瀬さんは避難できず、被爆したと言っていたからです。三瀬さんは将来、この戦争という悲惨な記憶を「記録」に変え、風化させず、次世代へと語り継いでほしいと言っていました。今、世界で武力を所持している国が多く目立ち、武力や核兵器は、80年前より数万・数千倍威力が高いと三瀬さんは言っていました。私は、これからこの記録を風化させず、そのままの事実を後世へ語り継ぎ、世界平和実現を目指します。

青少年ピースフォーラムの派遣学習を通して「本当の平和」について考えました。八十年前までの日本は戦争をしており、たくさんの人々が亡くなりました。特に広島や長崎に落とされた原子爆弾は何十万人の人の命を奪いました。原爆で被爆者となった人々の話を実際に伺い式典に参加して、今のように暮らせている日常は当たり前ではないと、改めて思いました。

原爆資料館では目を背けたくなるような写真ばかりでした。熱線により顔の半分が焼けている男性や、高熱により溶けて変形したビンなど一つ一つが原爆の残酷さを現実として感じる事ができました。

世界中を平和にするためには一人一人がまず戦争の恐ろしさを真剣に考え、それを受け止めることだと思います。現在もウクライナ侵攻、パレスチナ・イスラエル戦争、アフガニスタン紛争など日本以外の国々が戦争をしています。領土の取り合いや宗教問題など私には理解しがたい問題が原因です。私は戦争ほど命を奪い無意味なものはないと考えます。

ピースフォーラムの活動では全国の人達と「違いとは何か」について話し合いました。肌の色や目の色、名前や性別などその小さな違いも戦争が起こる原因になってしまうということを班で話し合いました。その違いは決して悪いことではない、その違いを認め合うことで多様性も広がると考えることができる、自分の考えだけではなく他の人の意見も取り入れることで視野が広がったと思います。

私達が戦争の無意味さを理解し、平和の重要性を考え、平和な世界に向けて行動することが私達の使命だと感じています。

僕は、今回のピースフォーラムで派遣されてこれまで自分が考えていた原爆に対する軽はずみな考えがなくなり、日常のなにもかもをすべてなくす恐ろしいものだという考えになりました。

僕がなぜこのように思ったのかというと、一日目に訪れた城山小学校で展示されているものを見た時に、自分が体験したわけでもないのに心が苦しくなり、もし自分の家族や友達がこんな真っ黒になったらどうなんだろう、思い出の場所が遺体を燃やされる場所になったらどうなんだろうと自分が体験したかのように重ねて考えていたからなのではないかと思っています。

そして、僕がもう一つ考える理由があります。被爆者の方の講話です。この講話はとても生々しく、自分がもしこのような目にあったらどうしようかと考え、つい黙りこんでしまいました。その中でも特に印象に残ったのは、やはり原爆が落ちた時の体験談です。「ピカッ」という光の後、三瀬

さんのお母さんが「けがはしていないか」と聞きに来て、その後学校の講堂でうめき声を出す人々の看病にあたり、「殺して、殺して」という悲痛の叫びがありながらもその後帰らぬ人になっていったという話が印象に残っています。僕達はまだ十代で、上手くこういった原爆のことをあまり分かりやすく伝えることが難しいです。そしてだんだんと被爆者の平均年齢が高くなり、被爆者のいない世界が訪れようとしているという課題もあります。

しかし、こういった活動や取り組み、戦争遺跡などで被爆者の思いを未来に受け継ぎ、世界恒久平和が実現され、核兵器がなくなり、広島長崎で犠牲になられた方々の「願い」を僕たち若者が叶えてあげられるように、僕はこれからも今回のような平和のための活動に積極的に参加していきたいと考えています。

15 証言の力

敬愛高等学校 1年 城戸 由治

この二日間で得たもの、それら全ては最後の被爆地である長崎でこそ得られたものでした。

一日目は、最も印象的であった三瀬清一郎さんによる被爆者体験講話について、二日目では、極めて貴重な機会であった原爆犠牲者慰霊平和祈念式典に参列した事を中心に綴ろうと思います。

被爆者体験講話では、被爆当時10歳であった三瀬さんの壮絶な戦争体験を聞かせていただきました。なかでも私の心に残っている言葉として「戦争に勝敗は無い」と言う言葉です。

この言葉には肉親を失わずとも水を求める悲痛な声、苦しみのあまり、「殺してくれ、殺してくれ」と嘆く人々を目の当たりにし、拳げ句の果てには、学校の校庭で死体が焼かれる様を嫌いほど見せられたと言う想像を絶する体験をされたからこそであると分かりました。

又、直接三瀬さんに「命を大切にするとはいどのような事なのか」と質問をしたところ、「命がある事が何よりも幸せ（と思う事）」と仰りました。

そして最後に「平和は人類共通の世界遺産」と言う言葉を残して講話が終了しました。

このような三瀬さんの格言を私自身が受け継いでいこうと思います。

二日目の平和祈念式典では、鈴木史朗市長による長崎平和宣言にあった「『地球市民』の視点」が印象的でした。そしてその後の「この視点こそ、分断された世界をつなぎ直す原動力となるのではないのでしょうか。」と言う言葉に強く共感しました。

このような被爆者の方や長崎市長が力強く仰った事を念頭にこれからの生活に励むのは勿論、今この国にある平和を持続し、更には世界中に連鎖させられるよう、このような活動に注力していきます。



わたし 私 は令和七年度ピースフォーラム派遣事業に参加して、わたし 私は改めて戦争の悲惨さと平和の尊
さを実感しました。

まず初めにバスでは、戦争によって苦しめられた人々の声をビデオで聞くことで、自分の中にあ
った平和に対する意識がより一層強まりました。

原爆資料館では、実際に現地の資料や映像に目を通しました。小学生の頃から毎年受けてきた平
和学習からは感じ取ることのできない様な、遺体が散らばった焼け野原の資料や皮膚がどろどろに
溶けてしまった人の資料、溶けて変形したビンの資料等、たくさんの資料が強く戦争の恐ろしさ、
悲惨さを示していました。

そして、私 が今回の派遣事業の中で一番印象に残ったアクティビティは被爆者体験談です。
被爆者の方から直接お話を伺うことで、資料や数字だけでは伝わらない、戦争の恐ろしさや原
子爆弾の破壊力、そしてその後も続く苦しみを生々しく伝えてもらうことができました。話を実
際に聞くことで、戦争がいかに多くの人々の人生を一瞬にして奪い、心に深く大きな傷を残した
ものなのか、痛感しました。

また、式典に参加して市長の声、被爆者の声を聞き、見て、本当に戦争は恐ろしいのだと、平和
のありがたみを感じることができました。

今回のピースフォーラム派遣事業を通して受け継いだ種を、自分の心の中だけに閉じ込めておく
のではなく、周りにも引き継ぎ、一人一人ですっかりと育み、あたため、世界中に鮮やかで綺麗な
花を咲かせたいです。

最後に、私 達学生がこのようが大きな事を経験させていただける機会があることに感謝したい
です。学んだことを活かし、これからの人生の視野を広げていきたいです。

わたし 私 が長崎の原爆について学びたいと思ったのは今年亡くなった祖父が、幼少期に長崎で被爆し
た際の体験を綴った手記を読んだことがきっかけでした。そして訪れた長崎では、戦争の悲惨さ
と原子爆弾の恐ろしさを再認識させられました。

原爆資料館では、原爆の被害についての資料や原爆投下直後の写真を見ることができました。
私 が特に印象に残っているのは、人が苦しみながら手を伸ばしている状態で炭化して亡くなられ
ている写真です。また、ピースフォーラムでは被爆体験談を聞く機会が多くあり、どれもあまりに
も生々しくて、耳を塞ぎたくなるような内容でした。中でも凄惨であると感じたのは「あちこちに

人の遺体が横たわっていた。遺体を触るとボロボロと崩れた。」という体験談です。

写真や体験談のようなことが 80 年前に起こったなんて私には想像もつきませんでした。原爆は私が思っていたよりもずっと酷く、惨いものだったのです。明日には死んでいるかもしれない状況の中で生きていた人々は、どんなに怖かったらうか、どんなに辛かったらうかと考えると胸が締め付けられる思いになりました。

水を飲むこと。勉強ができること。笑顔で家族と暮らせること。戦時中はこんな当たり前のことすらできない状況でした。だからこそ私たちは、先人達が築いてきた平和な世の中に感謝しなければならないと感じています。そして現在、被爆者の高齢化に伴う減少により、原爆によって多くの尊い命が失われた事実が風化してしまうことが懸念されています。『被爆者の方々が勇気を出して語ってくれた体験談を継承し、この平和な世の中を守る』それが、被爆者の第三世代である私たちが全うすべき使命なのではないでしょうか。

18

もう二度と繰り返さないために

能美学園星琳高等学校 3年 増田 美博

「平和は世界共通の世界遺産です。」今回の派遣事業に参加して一番心に残った言葉です。私は平和学習を積極的に行っていて、この事業を含め、これまでに広島、長崎の原爆資料館に合わせて五回足を運びました。そこで私は戦争の恐ろしさ、平和の尊さを学びました。そして、元は地元である北九州に原爆が落ちる予定であったという事実を知り、語り継いでいく決意を固めました。今回、青少年ピースフォーラムに参加した理由は、語り継いでいくために知識をより深く、正確なものにしたかったからです。

今回貴重な被爆体験を話して下さった三瀬清一郎さんが最初と最後に発した言葉。それは「平和は世界共通の世界遺産」というものでした。私はその言葉が忘れられません。今回の事業で、戦争、原爆にまつわる様々な場所に足を運びましたが、そこには海外の方もたくさんいて、多くの人が信じがたい光景に涙を流していました。その光景を見る度に三瀬さんの言葉が頭をよぎります。

今、この美しい地球上に核兵器一万発以上が存在しているほか、六十件近くの紛争が確認されており、多くの尊き命が奪われています。日本は戦争こそしていませんが核兵器保有国に囲まれています。他人事ではありません。年々、平和学習の重要度が下がってきているように感じます。たしかに内容は怖いし、目を背けたい内容だけれど無くしていい、忘れていい理由にはならないと思います。被爆者の方の平均年齢が八十六歳となり、被爆の実相の継承が課題となっている今こそ動くときです。

私は後世に限らず、生きていうちであれば大勢の人に原爆の恐ろしさを、被爆者の苦しみを語り継いでいきます。それは国境をも越えます。それが私の人生の目標です。青少年ピースフォーラムに参加して再確認しました。

保護者感想（抜粋）

小学生 保護者

これまで当たり前だった平和が当たり前ではないと理解したようで、世界のニュースや政治など様々な分野のテレビ番組を、興味を持って観るようになり、家族で平和について話す時間が増えました。

小学生 保護者

参加する前には戦争についての学びが浅く、漠然としていましたが、帰宅してからの体験した事を話す内容は具体的であり、沢山の事を話してくれました。

中学生 保護者

このように平和について学べる機会は本当に貴重だと感じています。これからも戦争の恐ろしさや平和の尊さを子どもたちに伝え続けていきたいです。

中学生 保護者

同世代の子供達と意見を交換しながら平和学習することで自分の思いに気づいたり、他者の意見を一緒に考える力がついたのではないかと思います。私達も改めて戦争について学びなおすきっかけとなりました。平和式典への参加は子供の心に強く残る体験でした。

中学生 保護者

近年、戦争について考えるテレビ番組や学校の取組みが減ってきています。目をそむけたくなる写真や聞くに堪えないお話ばかりですが、後世に伝えていかなければならない事実です。ピースフォーラムのような事業は続けていって、子ども達に平和の種をまいていってほしいです。

高校生 保護者

今年の夏は、平和学習に参加したことで親子共々、例年より深く戦争や平和について考え、また『調べる・知る・伝える』ことの大切さを再確認させられました。平和のまちミュージアムの職員やボランティアの方々には感謝しかありません。どうもありがとうございました。

北九州市の平和の取り組み

▶ 北九州市平和のまちミュージアム ◀

令和4年4月19日、小倉北区勝山公園内に『北九州市平和のまちミュージアム』がオープンしました。

「市民の戦争体験や当時の暮らしを物語る資料などを保存・継承していく。」「戦争の悲惨さや平和の大切さ、命の尊さについて改めて考える機会を提供する。」をコンセプトにしています。

ミュージアムには、多くの実物資料や最新の映像・音響技術を活用した記憶に残る展示をしているほか、寄贈いただいた資料の保存・継承、青少年ピースフォーラム派遣事業を始めとする様々な平和に関する事業を行っています。



▶ 「嘉代子桜・親子桜」の植樹 ◀

長崎の原爆投下で亡くなられた林嘉代子さん（当時15歳）を偲んで長崎市立城山小学校に植えられた桜は、「嘉代子桜」と名付けられ、今も毎春、花を咲かせています。

本市は、長崎に投下された原爆の第一目標であったことを踏まえ、この桜に込められた平和への願いを市民の皆様へ伝えるため、この桜に由来する「嘉代子桜・親子桜」を、市内の公園のほか、小中学校、高校等へ植樹しています。



▶ 「～考える・つながる・伝える～ 北九州市ピースフィールドクラブ」 ◀

北九州市の文化や歴史、戦争の悲惨さや平和の大切さ、命の尊さなどについて学び、様々な視点から“平和”について考え、仲間と共に、市内外の多くの人と繋がり、自ら行動・発信することができる人材を育成することを目的に、令和6年度に設立した団体です。

- 名称：北九州市ピースフィールドクラブ（愛称：ピーフィ）
 - メンバー：中学生、高校生、大学生、社会人で構成された33名（R7.12.1現在）
 - 主な活動：『広島研修&交流会』（8月）、『藤沢市&P.F.C ピースな交流会』（8月）、戦後80周年記念事業『平和へのプロジェクト 序章～そして、未来へ～』に運営スタッフとして参加（8月）、『-原爆被害等を疑似体験できる- VRゴーグル体験コーナー』運営スタッフとして参加（9月）、『つなぐ 戦争と暮らし（空襲体験講話&戦時食再現・実食）』（12月）、『自主企画部会によるイベント』（1～3月予定）等
- ※「ピースフィールドクラブ」が行う全ての活動は、原則、参加者が仲間と一緒に考え、企画立案・運営するものです。



『広島研修&交流会』



『藤沢市&P.F.C ピースな交流会』



『戦後80周年記念事業「平和へのプロジェクト 序章～そして、未来へ～」』



『つなぐ 戦争と暮らし』



令和7年 長崎平和宣言

1945年8月9日、このまちに原子爆弾が投下されました。あの日から80年を迎える今、こんな世界になってしまうと、誰が想像したでしょうか。

「武力には武力を」の争いを今すぐやめてください。対立と分断の悪循環で、各地で紛争が激化しています。

このままでは、核戦争に突き進んでしまう。そんな人類存亡の危機が、地球で暮らす私たち一人ひとりに、差し迫っているのです。

1982年、国連本部で被爆者として初めて演説した故・山口仙二さんは、当時の惨状をこう語っています。

「私の周りには目の玉が飛び出したり 木ギレやガラスがつきささった人、首が半分切れた赤ん坊を抱きしめ泣き狂っている若いお母さん 右にも 左にも 石ころのように死体がころがっていました。」

そして、演説の最後に、自らの傷をさらけ出しながら、世界に向けて力強く訴えました。

「私の顔や手をよく見てください。世界の人々 そしてこれから生まれてくる子供たちに私たち被爆者のような核兵器による死と苦しみを例え一人たりとも許してはならないのであります。」

「ノー・モア・ヒロシマ ノー・モア・ナガサキ

ノー・モア・ウォー ノー・モア・ヒバクシャ」

この心の底からの叫びは、被爆者の思いの結晶そのものです。

証言の力で世界を動かしてきた、被爆者たちの揺るがぬ信念、そして、その行動が評価され、昨年、日本被団協がノーベル平和賞を受賞しました。日本被団協が結成されたのは、1956年。心と体に深い傷を負い、差別や困窮にもがき苦しむ中、「自らを救うとともに、私たちの体験をとおして人類の危機を救おう」という結成宣言をもって、長崎で立ち上がりました。

「人類は核兵器をなくすことができる」。強い希望を胸に、声を上げ続けた被爆者の姿に、多くの市民が共感し、やがて長崎に「地球市民」という言葉が根付きました。この言葉には、人種や国境などの垣根を越え、地球という大きな一つのまちの住民として、ともに平和な未来を築いていこうという思いが込められています。

この「地球市民」の視点こそ、分断された世界をつなぎ直す原動力となるのではないのでしょうか。

地球市民である、世界中の皆さん。

たとえ一人ひとりの力は小さくとも、それが結集すれば、未来を切り拓く大きな力になります。被爆者は、行動でそう示してきました。

はじめの一步は、相手を知ることです。対話や交流を重ね、互いに理解し、小さな信頼を重ねていく。これは、私たち市民社会の大きな役割です。

私たちには、世界共通の言語ともいえるスポーツや芸術を通じて、また、発達した通信手段を使って、地球規模で交流する機会が広がっています。

今、長崎で、世界約 8,500 都市から成る平和首長会議の総会を開いています。市民に最も身近な政府である自治体も絆を深め、連帯の輪を広げています。

地球市民として、共感と信頼を積み重ね、平和をつくる力に変えていきましょう。

地球市民の一員である、すべての国の指導者の皆さん。

今年、「戦争の惨禍を繰り返さない」という決意のもと、国連が創設されてから 80 年の節目でもあります。今こそ、その礎である国連憲章の理念に立ち返り、多国間主義や法の支配を取り戻してください。

来年開催される核兵器不拡散条約（NPT）再検討会議は、人類の命運を左右する正念場を迎えます。長崎を最後の被爆地とするためには、核兵器廃絶を実現する具体的な道筋を示すことが不可欠です。先延ばしは、もはや許されません。

唯一の戦争被爆国である日本政府に訴えます。

憲法の平和の理念と非核三原則を堅持し、一日も早く核兵器禁止条約へ署名・批准してください。そのためにも、北東アジア非核兵器地帯構想などを通じて、核抑止に頼らない安全保障政策への転換に向け、リーダーシップを発揮してください。

平均年齢が 86 歳を超えた被爆者に、残された時間は多くありません。被爆者の援護のさらなる充実と、未だ被爆者として認められていない被爆体験者の一刻も早い救済を強く要請します。

原子爆弾で亡くなられた方々とすべての戦争犠牲者に、心から哀悼の誠を捧げます。

被爆 80 年にあたり、長崎の使命として、世界中で受け継ぐべき人類共通の遺産である被爆の記憶を国内外に伝え続ける決意です。永遠に「長崎を最後の被爆地に」するために、地球市民の皆さんと手を携え、核兵器廃絶と世界恒久平和の実現に力を尽くしていくことをここに宣言します。

2025 年（令和 7 年）8 月 9 日

長崎市長 鈴木 史朗



北九州市 Kitakyushu City Museum of Peace

平和のまちミュージアム

北九州市平和のまちミュージアム 公式アカウント

LINE 公式アカウント

LINEお友だち登録はこちら ▶



令和8年1月 発行

■編集・発行 北九州市総務市民局 平和のまちミュージアム事務局

〒803-0813 北九州市小倉北区内4番10号

■電話 093-592-9300